

アオバズクの食卓 —教材としての活用—

溝田浩美 (人と自然の博物館地域研究員)

はじめに

アオバズクは、東南アジアの越冬地から4月末ごろ繁殖のため日本に渡ってくるフクロウの一種である。繁殖期の間、アオバズクは昆虫などの翅や頭部をむしりにとって比較的柔らかい部分を餌として利用しており、下に落とされた翅や頭部などの残し餌からアオバズクの食性を調べることができた。

大谷先生に協力していただき、2005年と2006年の繁殖期に、アオバズクの餌となった昆虫などの残し餌を集め、パズルのように頭部や翅を組み合わせ、種を同定し、個体数を調べた。2006年は繁殖地の昆虫層と比較するため2週間ごとに3回夜間採集をおこない、捕えた昆虫はすべて標本にした。その結果、餌となった昆虫は97種1,430個体、3回行った夜間採集で捕らえた昆虫の総数は134種566個体となった。

この調査結果は「第1回共生のひろば」で“残し餌から推測するアオバズクの食卓”、“第2回共生のひろば”で“アオバズク一家をとりまく虫たち”として発表した。

このアオバズクの調査も昨年発表した“ハヤブサの落とし物”同様、環境学習の教材として活用してきた。

また、鳥類の調査ではあるが、餌となった昆虫の残し餌や、多くの標本を作成したことで、いろいろな角度から昆虫について学ぶことができた。今回は標本とともに利用してきた昆虫の切り紙も紹介していきたい。



アオバズク



落ち葉によく似たアオバズクの残し餌

活動内容

アオバズクの調査内容や標本は、主に生態系の話や昆虫の話に利用してきた。すぐ近くにいるのに気配を消して周りの景色に溶け込むアオバズク、落ち葉に紛れる残し餌の昆虫の翅の話、毎年営巣していた民家の屋根裏で先に子育てをしていたアライグマに食べられたアオバズクの話など、私が肌で感じた生態系の素晴らしさや、脆さを伝えるようにしている。

子どもたちの興味を引くため、アオバズクの話の前に昆虫の切り紙をすることもあった。画用紙からフリーハンドで作る昆虫は意外に評判がよく、最近では切り紙を主体とした講座の依頼もある。遊びで始めた昆虫の切り紙だが、昆虫の細部まで観察する良い機会になっている。

これらの講座の多くは兵庫県立西宮甲山高等学校の“甲高自然観察リーダー養成講座”で行っている。保育士、幼稚園教諭、小学校教諭を目指す生徒たち相手の講座で、2010年から7年にわたりおこなってきた。去年は、以前講座を受けた卒業生が保育士となり、昆虫の切り紙を仕事で使いたいと再び講座に参加してくれた。

アオバズクの話は神戸市立有野児童館の“おもしろ理科教室”（2010年）や有野台児童館の“夜間開館”（2013年）でも行っている。

また、この調査の経験を活かし、佐用町昆虫館のスタッフ、神戸市立道場小学校の自然学校やイオンモール猪名川での昆虫標本づくり、加西市で行ったひとはくキャラバンの夜間採集などの活動にも参加することができた。

今後の活動に向けて

アオバズクの調査の中で、大谷先生からは本当に多くのことを学ばせていただいた。先生の話は昆虫への愛があふれており、感激することが数多くあった。私自身が経験したこの感動を、昆虫の世界に興味を持ってもらえるよう伝えていきたい。

そして、アオバズクの講座を通して、我々人間も含め、生物は密接なかかわりの中でバランスを保ちながら生きていくことを少しでも感じてもらえたらと思う。



夜間採集捕えた昆虫の標本



昆虫の切り紙